

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520419

研究課題名(和文)

再構成と機能範疇の出現に関する共時的・通時的研究

研究課題名(英文)

A Synchronic and Diachronic Study of Restructuring and the Rise of Functional Categories

研究代表者：

田中 智之 (TANAKA TOMOYUKI)

名古屋大学・文学研究科・准教授

研究者番号：20241739

研究成果の概要(和文)：英語史における再構成、特に不定詞節からのかき混ぜ、および小節における主語と述語の倒置の分布について、その全体像を明らかにするために調査を行った。いずれの非定形節の場合も、機能範疇の出現と確立により、現代英語までに再構成現象が消失したことを提案した。前者の場合は不定詞標識 *to* の文法化、後者の場合は形態変化による新たな機能範疇の出現であり、異なるタイプの機能範疇の創発である。

研究成果の概要(英文)：This study has investigated the distribution of scrambling from infinitival clauses and inversion between small clause subjects and predicates, in order to reveal the whole picture of restructuring in the history of English. It has been proposed that the loss of restructuring properties was caused by the rise and establishment of functional categories in the two types of nonfinite clauses. They involve different types of functional category emergence: the grammaticalization of the infinitive marker *to* in infinitival clauses, and the rise of a new functional category as a result of morphological change in small clauses.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：英語学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：再構成、機能範疇、不定詞節、小節、文法化、叙述

1. 研究開始当初の背景

通常は節の境界を越えて適用されない統語操作、例えば受動化、接語化、かき混ぜ等が、不定詞節の境界を越えて適用される場合があり、そのような透明性現象は再構成(restructuring)と呼ばれており、現代ゲルマン語やロマンス語に関しては多くの研究がある。また、同様の透明性現象がイタリア語の小節small clauseにおいても見られることが、いくつかの文献で指摘されている。

現代英語では再構成現象は観察されないが、初期の英語の不定詞節において類似の現象が見られることが、いくつかの先行研究において指摘されている(Visser 1973, Takahashi 1982, Fischer 1990, Denison 1993, Wurff 1997, Los 2005)。しかし、これらの研究では散発的にデータが提示されているのみであり、英語史における再構成の分布の全体像が明らかにされておらず、英語史のある時期におい

てなぜ再構成が消失したのかに関して原理的な説明が与えられていない。さらに私の知る限り、小節における再構成については、英語史に関するこれまでの先行研究において、それに関わる言語事実の指摘さえも全くないのが現状である。

これまでの自分の研究の一部において、英語史における不定詞節と小節の構造変化について、特に機能範疇の出現という観点から考察してきたので(Tanaka 1994, 1997, 2003, 2007)、再構成についてもその研究成果を生かしたアプローチが可能ではないかと考え、本研究の着想に至った。

また、機能範疇の出現に関しては、これまでの先行研究において、(1)既存の語彙範疇が機能範疇に変化する、いわゆる文法化の事例(Roberts and Roussou 2003)、(2)語彙範疇のみからなる構造に新たに機能範疇が創発する事例(Gelderen 1993, Osawa 2003)、という2つのタイプが報告されている。したがって、これまでに本格的に議論されたことがない英語史における再構成について、機能範疇の出現という観点から研究することによって、機能範疇の出現というテーマに対して新しい視点からアプローチすることができると考えられる。

2. 研究の目的

まず、英語史における再構成の歴史の変遷の全体像を把握するために、電子コーパスを用いた調査を行い、生成文法の最近の理論的枠組みである極小主義理論に基づいて、その調査結果に関して理論的説明を試みる。その際、現代ゲルマン語やロマンス語における再構成に関する研究動向の中でも、節のサイズに注目したアプローチを採用する。そして、英語史における不定詞節と小節の構造変化に関して、これまでに積み重ねてきた研究成果に基づいて、機能範疇の出現という視点から、再構成の歴史の変遷、特になぜ英語史のある時期に再構成が消失したのかという問題について考察する。

3. 研究の方法

これまでの準備的な調査を継続し、ヨーク・コーパスやヘルシンキ・コーパス等の電子コーパスを用いて、古英語から近代英語における不定詞節と小節における再構成に関するデータを集めて、その歴史の変遷の全貌を明らかにする。小節における再構成については、小節の構造変化をテーマとする、横越

梓(当時、名古屋大学大学院、現在、名古屋工業大学准教授)との共同研究の一部として、電子コーパスを用いて調査を始めているので、連携しつつ調査を進めることとする。

以上のような調査から再構成に関する歴史の変遷が明らかになれば、極小主義理論に基づいた原理的説明に着手する。その際、自分がこれまでに行ってきた不定詞節と小節の構造変化の研究に照らして、再構成の歴史の変遷について機能範疇の出現という観点から説明を試みる。そこでは、不定詞節と小節において機能範疇が出現したことを支持する再構成以外の言語事実、およびそれが観察されるようになった時期について検証し、再構成の歴史の変遷と時期的に合致するかを考察する。また、以上の調査から結論として導かれた不定詞節と小節における機能範疇の出現と、これまでの先行研究において論じられている機能範疇の出現の事例を比較検討し、機能範疇の出現という広く議論されているテーマの中での本研究の位置付けを明らかにする。

4. 研究成果

まず、再構成現象の1つである不定詞節からのかき混ぜについて、(1)準備的研究の中で得られた中英語のデータに関する理論的説明、および(2)古英語と近代英語のデータの調査を行った。(1)については、不定詞節からのかき混ぜが初期中英語では頻繁に見られたが徐々に衰退し、15世紀初頭にはほぼ消失したという事実を、最近の生成文法の枠組みにおいて理論的説明を試みた。まず、例外的格標示(Exceptional Case Marking)節からのかき混ぜのデータより、かき混ぜがA移動であることを論じた。この移動は、古英語から後期中英語にかけて、目的語・動詞語順を生じる移動と同一であると考えられる。したがって、不定詞節からのかき混ぜの消失は、目的語・動詞語順の消失と同様に、vのEPP素性の消失の帰結として説明される。コントロール不定詞節の場合には、1300年頃にかき混ぜが急激に減少するが、これはコントロール不定詞節におけるPRO主語の出現と関係がある。すなわち、不定詞標識toの前置詞から機能範疇への文法化によりコントロール不定詞節がTPへと変化すると、その外項が不定詞形態素ではなく、PROとしてvPの指定部に現れるようになる。その結果、コントロール不定詞節のvPがフェイズとなり、さらにPROの介在により、A移動としてのかき混ぜが阻止されるようになるのである。

(1) について以上のような結論を導いたが、その後の(2)の調査により、古英語では、コントロール不定詞節、および特に使役動詞の補部に現れる顕在的主語を欠く不定詞節からのかき混ぜが多く観察され、初期中英語よりも頻度が高いことが分かった。また、初期近代英語の調査により、コントロール不定詞節からのかき混ぜは稀ではあるが、16世紀後半まで可能であったことが明らかとなった。さらに、初期近代英語には例外的格標示構文の主語の移動が散見されるが、そのほとんどが「動詞—不定詞主語—副詞(not)」という語順で現れるので、かき混ぜではなく目的語転移の事例であると分析される。

以上の結果を踏まえると、不定詞節からのかき混ぜは、古英語から初期中英語までは頻繁に見られたが、その後徐々に衰退し、16世紀中には消失したことが判明した。この言語事実は、従来の研究にはない新たな発見であると言える。この結果に基づいて、コントロール不定詞節からのかき混ぜの消失は、機能範疇Tの確立によりPROが義務的に不定詞主語として現れるようになったことによる、そして、例外的格標示構文については、かき混ぜと目的語転移を区別する必要があり、前者の消失は「目的語—動詞」語順の消失と関係がある、という結論に至った。

次に、不定詞節の再構成に関する研究が一応の結論に達したので、小節の再構成現象として、小節主語と述語の倒置について調査を行い、機能範疇の出現という観点から生成文法に基づく理論的説明の可能性を探求した。まず、古英語から初期近代英語までの電子コーパスに基づく調査より、初期の英語では小節主語と述語の倒置が現代英語よりも広く観察されることが分かった。現代英語では、小節主語が述語よりも重い場合にのみ倒置が起こるが、初期の英語では前者が後者と同じ重さ、または前者が後者よりも軽い場合にも倒置が可能である。現代英語の小節における倒置には主語の右方移動が関与しており、右方移動に対する制約が英語史を通じて変化していないとすると、初期の英語では、述語の左方移動により倒置が生じていたと思われる。さらに、データを注意深く見てみると、述語全体が移動している例と述語の主要部のみが移動している例が観察され、後者の例はイタリア語で見られる小節再構成と同様の現象である。この言語事実も、従来の研究にはない新たな発見である。

小節の構造変化、特に機能範疇の出現を示す独立した現象として、as、遊離数量詞、虚辞主語の分布について以前に調査を行った。

その結果、14世紀に小節内に叙述を認可する機能範疇Pred(ication)が出現し、18世紀中に確立したという仮説を立てた。そして、今回この仮説を上記の倒置にも適用し、Predの有無が小節主語と述語の倒置可能性に関与していると考えに至った。すなわち、Predが確立される18世紀までは、小節が語彙範疇のみからなる構造を持っていたので、述語(の主要部)の左方移動が可能であったが、18世紀中にPredが確立されると、PredPがフェイズであるために述語(の主要部)の左方移動が不可能となり、現代英語では倒置は右方移動によってのみ生じるのである。

最後に、これまでの研究の総括を行うとともに、不定詞節と小節における再構成の歴史的変遷において重要な役割を果たす機能範疇について、2つの事例を比較しながら、その出現の原因について考察した。まず、不定詞節の再構成現象としてコントロール不定詞節からのかき混ぜについて研究してきたが、古英語から初期近代英語にかけて不定詞標識toが徐々に前置詞から機能範疇Tへと変化した結果、不定詞のvPがフェイズとして確立し、さらにPRO主語が義務的に現れるようになったために、A移動であるかき混ぜが16世紀中に消失したと結論付けた。この不定詞節における機能範疇の出現は、不定詞標識toが語彙範疇である前置詞から機能範疇Tへと変化した、文法化の典型的な事例である。一方、小節の再構成現象として主語と述語の倒置について研究してきたが、14世紀に小節内に叙述を認可する機能範疇Pred(ication)が出現し、18世紀中に確立した結果、それ以降は小節がフェイズとして確立されたために、述語(の主要部)の左方移動が許されなくなり、主語と述語の倒置が現代英語と同様の制限に従うようになったと結論付けた。この小節における機能範疇の出現は、既存の語彙範疇が機能範疇へと変化する文法化であるとは考えられない。そこで、中英語に起こった小節主語と述語の形態的一致の消失に基づき、両者の形態的一致があった時代には小節における叙述が形態的に認可されていたが、その消失により機能範疇Predが出現し、叙述を認可するようになったと結論付けた。すなわち、小節における機能範疇Predの出現は文法化ではなく、主語と述語の形態的一致の消失が原因であり、叙述理論が重要な役割を果たすという点で、形態論により駆動された統語変化であるということになる。従来の研究でもこのタイプの機能範疇創発の事例の存在が主張されてきたが(Geldereren 1993, Osawa 2003)、それらは法助動詞や冠詞の発達など、典型的な文法化の事

例である。一方、本研究で明らかとなった機能範疇Predの出現は、既存の要素の文法化であるとは考えられないので、形態変化の帰結としての機能範疇創発の事例の存在を立証したという点で、国内外の当該の研究分野へのインパクトは大きいと言えるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

1. Tomoyuki Tanaka “On the Structural Change of Bare Infinitive Complements in the History of English,” Hirozo Nakano, Masayuki Ohkado, Tomoyuki Tanaka, Tomohiro Yanagi, and Azusa Yokogoshi, eds., *Synchronic and Diachronic Approaches to the Study of Language: A Collection of Papers Dedicated to the Memory of Professor Masachiyo Amano*, 371-384. Eichosha Phoenix. (2010 年) 査読無

2. Tomoyuki Tanaka and Azusa Yokogoshi “The Rise of a Functional Category in Small Clauses,” *Studia Linguistica* 64, 239-270. Wiley-Blackwell, UK. (2010 年) 査読有

3. Tomoyuki Tanaka “Agreement, Predication, and the Rise of Functional Categories in Nonfinite Clauses,” *English Linguistics* 27.2, 374-398. 日本英語学会 (2010 年) 査読有

4. 田中智之 「EPP 再考：英語史における主語の分布を証拠として」、『名古屋大学文学部

研究論集 (文学)』56, 83-98. 名古屋大学文学部 (2010 年) 査読無

5. Tomoyuki Tanaka “Scrambling from Infinitival Clauses: A Case Study of Restructuring in the History of English,” Mutsumu Takikawa, Masae Kawatsu, and Tomoyuki Tanaka, eds., *Ivy Never Sere: The Fiftieth Anniversary Publication of The Society of English Literature and Linguistics, Nagoya University*, 475-492. 音羽書房鶴見書店. (2009 年) 査読無

6. 田中智之 「一致、叙述、小節における機能範疇の出現」、『第 81 回大会 Proceedings』188-190. 日本英文学会 (2009 年) 査読無

7. Tomoyuki Tanaka “The Rise of Lexical Subjects in English Infinitives,” *The Journal of Comparative Germanic Linguistics* 10, 25-67. Springer, Germany. (2007 年) 査読有

8. Tomoyuki Tanaka “Bettelou Los: The Rise of the *To*-Infinitive,” *The Journal of Comparative Germanic Linguistics* 10, 235-248. Springer, Germany. (2007 年) 査読有

[学会発表] (計 2 件)

1. 田中智之 「不定詞節における目的語の分布について」、日本英語学会第 28 回大会シンポジウム (2010 年 11 月 14 日：日本大学)

2. 田中智之 「一致、叙述、小節における機能範疇の出現」、日本英文学会第 81 回大会シンポジウム (2009 年 5 月 30 日：東京大学)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田中 智之 (TOMOYUKI TANAKA)

研究者番号：20241739

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし